

栗生の方言（一）あ之部～こ之部

山崎, 時造
鹿児島大学教養部助教授

崎村, 弘文
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10398>

出版情報：文献探究. 26, pp. 34-54, 1990-09-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



栗生の方言

山崎時造（こ） 著
山崎村弘文（あまの部） 監修

『栗生の方言』は、鹿児島県熊毛郡屋久町栗生の方言語彙集である。

著者・山崎時造氏（明治二三年（一八九〇）昭和三九年（一九一四）は栗生の出身で、その家は代々栗生の庄屋を務めていた。氏は、明治三八年（一九〇五）栗生尋常高等小学校卒業後、同四〇年（一九〇七）私立東京中学校第三学年に編入学、翌年同校を退学された。その後、明治四三年（一九一〇）から大正四年（一九一五）まで栗生尋常高等小学校教員を勤められ、昭和に入つて政界へ転進、昭和一五年（一九四〇）には村長に当選され同一九年（一九四四）まで同職を勤められた。村長辞職後は、私財を投じて郷土誌発刊を企図され、昭和三九年三月その完成を見た後六ヶ月にして逝去された。

氏が多くを執筆された昭和三九年版『屋久町誌』の高水準なることは、それを一瞥しただけで知られるところであるが、ここに紹介する『栗生の方言』もその質量において一般の方言語彙集を凌駕するものである。

例之ば、屋久島方言関係の同種資料としては、昭和五一年（一九二六）発行の小川秀直氏著『鹿児島県熊毛郡上屋久町』永田方言集が知られているが、同書収録語彙が二九九項目（三一丁）であるのに対し、『栗生の方言』のそれは二〇四〇項目（一一二〇丁）に上り、ア・クセント等の精細注記をそ無いが、しばしば懇切な語源注記・用例注記を存し、その方言史資料としての重要性を明白にしている。

原本は、B4版葉半紙（役場の予算用紙）の二つ折り裏を用いた表紙一丁・本文一二〇丁の仮綴じ本で、各丁一面に一〇項前後の項

目を大書し注記をやや小さい字にて加えるという体裁（ペン書き）を採っている。表紙には、打うつけ書きの太字で「栗生の方言／山崎」と有る。予算用紙が昭和三一、二年頃のものであることから見て、山崎氏が本書を執筆されたのはその頃かそのやや後と見るのが妥当であろう。

山崎氏がこれほどの著作をものされた理由であるが、まずはその郷土に対する興味と愛憎の念とからであることは疑い無い。

栗生方言は、集落ごとに少しづつ異なる屋久町方言の中に在って他と相異するところの大きい方言の代表的なものであって、そのことは次の二点に集約されている。

(1) 共通語ラ行音相当部分のア・ヤ行音化が、リ・レのイ化の如く限定的にしか見られない。

(2) 共通語ガ行音相当部分のラ行音化が見られず、むしろ同ラ行音相当部分のガ行音化が見られる。

そして、氏の語彙集には、その関係の項目が目立って多く収録されているのである。

また、郷土出身者が方言がもとで損着を蒙つた事例を引いてへ言葉の大切なことVを指摘されていること（へんこうかつもんVの項、参照）など、地元の教育と政治に携つた者としての実感を示すものであり、著述の動機の一部ともなったものであろう。

執筆に当っては、記述中に見えるへ金沢辞林Vへ物の本V等種々の書を参考されたものらしい。

これを翻刻するに当っては、次のような方針を採った。

【改めた点】

。へあ之部Vへい之部V等の部立てと見出し項目とを太字表記とした。

。原文項目配列は基本的に五十音順であるので、間々それに即さない項目の配列を改めた（原標出語句は新標出語句参照の注を加えて残した）。

。原文の長音を含む語の配列には、ハ―Vを用いる場合とハあいうえおVを用いる場合とが有り若干の混乱が見られるので、これを訂した。ハ―Vを用いる例は、へまちVへまーちVの如く、長音を含め語句の直後に来るのを原則とする。

。原文の抹消箇所てひとまず示した方が良いと判断したものについては、〇〇〇の如きかたちで示した。

。明らかなき誤字と見られるものについては、訂した。

。原文にはほとんど無い句点を施した。

【そのままとした点】

。へじVへぢVへずVへづVの表記については、原文を尊重した（ただし、いわゆる四つ仮名の区別が存するとは認められない）。

。稀に、共通語語彙と同形と見られる語彙が掲出されているが削除しなかった。

なお、この紹介稿を成すに当って、屋久町郷土誌編さん室の岩川直隆室長を初めとする室員の皆さん、ならびに原本所蔵者である郷土誌編さん委員長・日高徳員氏には、大変御世話になった。記して感謝申し上げる次第である。

あ之部

あア しり上りに発音する。「あらまーほん^{ママ}とですか」。

あい あゆ（鮎）。屋久島では粟生川一湊川だけに居る。

あーい あり（蟻）。

あいあいと 安堵する程充分に、たくさんに。

あいがてー ありがたい。

あいぎれ 裁ち残りの布地。端布。

あいぞう 愛想、応対。もてなし。又顔色「ー（愛憎^{ママ}）に見せる」。

あーいなーい ありのまま。

あいに 歩み。「あいにめ」歩め。「あいにむ」歩む。

あいもん 値段の変動のはげしいもの。水産物等の不安定価格の商賣品。「ー商売」。

【あえ ハあゆVの次項。】

あえた おち（落）。「ーた」落ちた。「ーる」おちる。

あお 青北風。十一月頃吹く北の季節風。おなごたまし。

あおい 船の根板と上板との接合点。

あおさーぎ 青鷺。

あか 船にはいる水。「ーとい」船のあかを汲み出すひしゃく又船

のあかを汲み出すこと。（あか「閻伽」は仏前又は墓前に供える

浄水）。

あかい あかし（証）。「あかよ立てんか」証しを立てよないか。

又あかり（明）。又あかり（灯）。

あがい あがり。数のおわり。十。

あがいぎ 上り座敷。「おとこー」次ぎの間。又中の間ともいう。

「おなごー」妻戸側の座敷。「あがいぐち」上り口。

あがいさがい 上り下り。

あがいもん 上り物。神仏への供物。

あかし 松の脂多きもので燃えやすいもの。たきつけに用いる。又
灯火として用いる木。

あかすい あかすり。入浴などに用いる布又は手拭。

あかつつ あかつち(赤土)。

あかてー あかだい(赤鯛)。

あかばら 赤腹。赤痢。又あかばらそうじ。

あかめー 赤眼。又あかめの魚。

あきねー あきない(商)。商賈。

あきんど あきうど。商人。

あーく あく(灰汁)。「ーまーき」もち米を灰汁につけおき竹の
皮又は布などに包み充分に煮熟したもの。單障の携帶口糧として

發達したもの。

あくせーひろげた もてあまして当惑した。

あくちえく 口を大きく開らく。

あくとう 乱暴。「ーもん」乱暴者。

あくどうもくどう 何んの役にも立たぬがらくたもの。

あくばる 当惑する。もてあます。

あごたー あぎと。あご。

あした あす。明日。

あしなか あしなかぎょうり(足半草履)。

あずび あそび。「ーんこう」あそびごと「あんびんこう」。

あせ 船の浮力。積荷力。「ーがつよか」荷受けがよいこと。「ー

がいった」荷をたくさん積んで船がさがった。

あせーぶ あせば(汗疹)。

あたゐ あたり。「ーこたい」あたり近所「ーきんじよ」。又あた

り(中)。腐敗又食中り。

あだゝい 仇威。恐るべきこと。大変な。「ーとなーねー」大変な

3オ 奴だねー。「ーもんぢや」大変なものだ。

あだゝいこと 大変なこと。仰山なこと。

あだがいかいつく ふざける、ざれつく(仇掛り着く)。

あだじこ たくさんなほど「ーと」。

あだしごと 徒仕事。無駄な労力。徒勞。

あたまかぶい あたまごなし。

あたまかंबい 頭からがんぶりとかぶること。ひしよぬれ。

あだわいか いやらしい、きたならしい、むごたらしい。大変な、
恐ろしい。

あだわーろー あざわらう。

あち あに(兄)。

あちえくちやわからん 何が何だかさっぱりわからん。

あちえこすい あてこすり。

あちえむねー あてもない。途方もない。

あちえやーい あてもなく。

あつける 金銭又は商品などを預ける。買物をたのむ。注文する。

あつこう いろいろ。もてあそぶ。

あつたらしい あたらしい(可惜)。おしい。「あつたらしか」。

あつちこつち 反対に。

あつちやー 歩むこと。あんよ。幼児の語。

あつちやこつちやー あちらはこちら。反対に。

あつらこつら あちらを少しこちらを少し。あらまし。大畧。

あっぱー あば、おし。

あぶあぶ まさに水に溺れんとしてもかくさま、あぶあぶ。

あとうちかた 後妻。

あどなか たあいもない。だらしのない。おろかしい。あどねー。

あどねー あどなか。

4オ

3ウ

あないこない 九死に一生を得るような大変なこと。どうすること
もできないような危ないこと。

あなじ 北々西風。亥の方向から吹く風。北あなじ。あなせ。

あば おし。

あばちやむねー 仰山な。数えきれない。途方もない。

あぶいこ あぶりこ。魚や餅などをあぶるもの。

あぶる あびる（浴）。

あべつけむなか あてにならない。不安心な。

あべつけむねー あべつけむなか。

あまいもん 余りもの。

あまじんまく 雨陣幕。雨をとめない強い風が吹くこと。

あめがもうった 雨漏がした。寝小便をたらした。

あーもーい あれもり（泡盛）。琉球で造る火酒。泡盛は海を渡【

5オ】れば度が強くなるというので琉球から鹿児島へ積み出す際
には或る程度の水を割る。鹿児島へ着いたら鹿児島でもまた水を
割る。それでもやはり火酒として賞揚された。

あーもーいばましか 弱々しくかあいそうなさま。

あや 精気。「ー」がなか「精気がない。「ー」もせーもなか」根も精
もなか。「ー」がされた「精根がつきた。

あゆ おち（落）。「ーる」おちる。

あえ おち（落）。「ーる」おちる。

あよしか 弱いさま。強くないこと。弱そうなこと。

あよしこれよー ああこれはどうすればよいかと苦痛にたえず悲し
み叫ぶさま。

あら 意外なときの発声。おや。

あらえー 荒餅。大喰い。「ー」かける「大喰いをする。

あらくましい 荒らくれた格好。荒々しいさま。

あらけ 人家に近い方。「奥の方」に對する「手前の方」。
あらける 密集してあるものを掻き分けて或る間隔を保たせること。
「薪をー」。「あらけて干す」。

あらこう 荒々しいさま。荒々しい人。強わ者。

あらしか 屈強。「ーもん」屈強な人。□□。

あらぼねおい 徒骨折り。徒勞。

あらめどーし 荒目通し。よく嘘をつく人。

あれ おち（落）。「ーる」おちる。「ーた」おちた。

あれー ありがたい（洗）。あろう。

あーれー だんごなどにまぶす粉、もち取り粉。又あれい（唾鈴）。

あわす 柿の渋をぬくこと。さわす。

あわす たさわした。

あわす 柿の渋をぬくこと。さわす。

あわれくさか さわし柿のようなにおい。軟柿くさい。

あーんとした 案外な思いをした、あつけにとられた。

あんぱくもん 腕白者。悪いしたたか者。

あんびんこう ままごと。遊びの道具。おもちゃ。

あんべー あんばい（塩梅）。

あんわろう あの野郎。

い之部

いーきり（雫）。又雫で穴をうがつこと。「ーいる」。

いい ゆい（結）。

いいおき ゆいごん（遺言）。

いいかぶる 言い間違える。

いいきかせる 言い聞かせる、いいきける、おしえる、さとす。

いいさかな ிரிさかな（煎肴）。肉などを煎りて作らえた肴。

いいしお 入り潮、みちしお、空が空へ入り来る気運。

いしん いんしん(音信)。「ーもん」いんもつ(音物)。温泉

や出養生に行っておる人又は他の部落等に居る人にやる見舞品。ヲ

いちかせ 言い聞かせ。訓え。諭し。

いちける 言いつける。

いッ しがゆいさま。切齒するさま。

いつける 言うてきかせる。訓える。諭す。又命令する。いいち

ける。

いめ いらめ。費用。

いもん 煎り物。

いうえー いわい(祝)。「ーもん」しめかざり。

いえない いえなり(家鳴)。

いお うお(魚)。「ーばーち」魚入れ桶盤台。「ーつい」魚釣り。

「いお」は「うお」の古語である。

いかーい いかー碗。原始的な松の枝木に石をつけたものを「やま

たろう」【ワウ】といい単に石だけを用いたものを「いかーい」

といい又金属製のものを「かなご」という。

いかーぢやー いかなくてはならない。

いがわ 井側。井戸。

いきしな ゆきしな。行くついで。

いきつく 活着する。

いきとーいけとーい ゆきとーうり(行通)けとーうり(帰通)。往つ

たり来たりの通りがけ。

いきようもん いきようもの(異行者)。他と対等にすらすら話し

ができないもの、いなかッペ。

いきる むしあつこと(蒸暑)。又魚の塩通りが悪くて腐敗した

みたになること。

いきれはぎれ 言いたい放題に悪口すく。

いぐち 猪口。鋸で木を横断するとき挽きぐちが斜めになること。

又みつぐち危唇。

いけ 強めていう語。「ーすかん」。「ーぼんのーむねー」。

いけ 屍を埋める穴。墓穴。いけに雨が降り込めば死者が続く。

いげ いが。とげ。

いけだめーちえ 息をつめて力強くものをいうさま。語気を強めて

ものいうこと。

いけどい いけどり。

いこ 頭髮のふけ(糞糠)。又魚のうろこ(鱗)。

いごめ ிரりごめ(炒米)。ほしいい(乾飯)を砂鉄で炒りて脹ら

せたもの。元米は残飯の利用から工夫されたものであるが特に米

を炊いて乾飯をつくりお茶受けとしていごめを作った。

いざい いざり(壁)。

いざーい いざり(大漁)。夜火を灯して魚の寝たもの又は静かに

して居るの【さウ】を探してやす(魚叔)で突いて漁る。

いさけー いさかい(諍)。

いざごぎ もめごと、いい争い。

いさば 勇魚場又は魚売場。運搬帆船。

古昔魚の干物塩物を売るところを「いさば」というた。津々浦々

に停泊して売り捌いた。後では仲買達が運搬船まで来て船上で取

引きするようになり運搬船が魚売場になったので運搬船を「いさ

ば」というようになった。又いさば。大きさは(いさばに限らず

帆船はすべて)主帆の帆布の反数できめた。帆布の一反は布巾が

約六十糎位で最大の船が三十三反の千石積船であった、屋久島航

球間の交易船は十八反帆屋久島鹿尾島の運搬船は十三反(約四十

噸位)又十一反帆であった。

いすぶる ゆりうごかす、ゆする、いそぶる。

いぜ いて(井手)。「—ごう」井堰。又ゆて。「ふしー」節ゆて。

節製造のため魚を煮ること。「—がま」節をゆてる大きな釜。「—き」筈木。節をゆてるに用いる薪、松薪。

いぞのせつちび いぞきんちやく。

いぞぶる ゆりうごかす。ゆする。いすぶる。

いぞまつ いぞまつ。磯松。海松。

いぞもん あわびに似た貝。味噌炊き又炒りものによい。

いたあし 板足。土ふますの凹みのない足。くわひらあし(鉄平足)。

いたいたと 痛々と、満足するまで充分に。

いたか 痛い。又熱い。

いたぎれー 板切れ。板の切れはし。

いたらんこと 到らないこと。理屈にあわないこと。「—いうな」。

又迷惑なこと。「—すんな」。

いちぢいぢ 心はやるさま。

いちけ ゆづけ。ゆは(湯飯)。

いちのき いちいの木。槽材に費用される。

いちぶ いちひ。

いちめく うごめく。

いちめーざお 一枚竿。衣原一枚を干すために作った干竿。衣紋竿。

いっかえす いっかーす。

いっかくる やそぎかける、いっかける。

いっかける いっかくる。

いっかーす 逆反す。器をくつがえして中ものを出すこと。こぼす。

いっかぶる こぼす。あふれしむる。

いっきー 一気。すぐ。

いっこうもん 一向者。一刻者。

いっさきき いっさき(青柄)。又その繊維。又いさき(雑魚)。

いっしょうき 一周忌。

いっする 逸する、すてる、おとす、うしなう。

いっせき 一□。一時に、同時に、一しよに、又漁業の船株や網株。

「—もち」漁業の株持ち。

いっせつらす 逸せ散らす。棄て散らす。棄ててかえりみない。

いっせる すてる、おとす、うしなう、いっする。

いっちがひ 一っちが日。一日中。いつまでも。

いっちやまん 系満。琉球人。又系満の乗って漁などに用いる三角

型の箱舟又丸木舟。

いっちんち 一日。一日中。いっちがひ。

いっとき 一時。しばらく。

いっときぞつとき 一時やそこらで。少しの時間では。「—できる

もんか」。

いっぺー いっばい。充分に。うんと。

いっもかつも 何つも且つも。常に。しよっちやう。始終。

いっんこと 一つのこと。

いっんめー 一つのまに。

いー 痛い。又熱い。

いとしい 最惜しい。なつかしい。

いなかもん いなかもの。はづかしがりや。

いなや 「—の返答」応か否かの返答。

いねーぎ 木桶をかつぐもの。天秤棒の両端にかぎをつけたもの。

いねーごえ 下肥。人糞尿。

いねーぼう おおこ(初)。てんびんぼう。さし。

いのい いのり(祈)。

いのう 肩にかつぐ。いねぎやいねいぼうでかつぐ。

いひかけ ゆひかけ。げんまん。

いひがね ゆひわ。

いふわー うぞ。「ーが」ほんとうか。「ーな」そうかなー。「ーごと」うぞごと。「ーふい」うぞつき。

いもがら ずいき。芋の地上茎(正しくは茎の地上茎の生)のものが

「ずいき」「ずいき」を干したのが「いもがら」であるが粟生な

どでは「ずいき」を「いもがら」という。

いや えな。胎児を包んだ膜及び胎盤(胞衣)。「ーぐぞ」初生児

が始めて排泄する糞。かにはば、かにくぞ、たいし(胎尿)。

いようもん 異様者。いなかつべ。いきようもん。まともに挨拶も

できない者。

いらくうげ。

いらいら 鋭利な感じ。針で刺すような感じ。

いらいらつと 強い陽ざしが短時間であること。

いらこ いらこまつ。まつの魚の一種。

いる 錐で穴をうがふこと。

いれこ 箆などを段々重ねて収めるように造つたもの。「ーのはー

ち」いれこになつた鉢。「はーちのー」同じような大きさの子供

が数多いこと。又ろべぞ(槽脚)をはめるために槽の幹につけた

具。

いれもんがましい 容れ物わずらわしい、物を少しずついれて容器

が数多くわずらわしいこと。

いわせん 遮り無断行すること。障害があるとはいわせないとの

こと。

いん いぬ(犬)。「ーがめ」犬神。「ーがめもち」犬神を使って

他を呪う人。

いんきよう いんきよ(隠居)。

いんづる 中づり木。譲る木とかけて代々譲る義として正月のしめ

かざりに用い又祝いごとの折りに皿に敷き又は井などの景色【12

ウ】に使つたりする。めでたい木。

いんどいき 一時に、同時に、一しよに。

いんのくぞ ものもらい(眼瞼腫化腫症)。かたい、こじき即ち物

貫いに多く発生するために「ものもらい」という。不潔なために

生するので「いんのくぞ」という。

いんぶりりー 犬ぶるい。犬がふるえるようにがたがたふるうこと。13オ

う之部

うーい うり(瓜)。

ういきー 仰山。おうきに。多きい。多い。沢山。鹿児島語に「う

ぐっ」という語がある。「おおくっ」「おおく」である。又「う

か」というのは「おおか」「多か」「多い」である。共に「お

お」「う」と発音されるのである。「ういきー」の「う」も「お

お」で「おおいきい」(多いきい)「おおきい」(多きい)「お

おい」で多い沢山の意味である。

うえー おい(甥)。「ーおしき」甥と伯父貴。甥姪と伯叔父母と。

又おい(追)。「ー」とはかす「追ひ払う。「ー」をうつ」追銭をす

る。

うけぐち 受口。下唇の出口。

うせき うてぎ(腕木)。槽の腕にする材。

うせろう 失う。うせる。

うたうだと ぐっすり茶々と眠るさま。

うだーつ うだち(税)。つか(束)。

うちかた 家内。妻。

うちげー 打ち櫂。取り手のないもの即ちオイル、オイルの短いもので縦てに擡もぐもの即ち手擡へ琉球人などが使うもの。オイルの頭部に横材をつけたもの即ち練擡等の区別がある。

うちげーし 打ち越し。何かを隔てて向うがわ。

うちけーる うちかえる。病がぶりかえす。

うちんこ 魚の心臓。うす。しちみき。

うつ 耕つ。たがやす。「はたけを」畑を開墾する。「たうち」

田を耕起すること。「のうち」・野原を開墾すること。

うつきん うこん。又うこん色。

うっする 失まつする、失う、すてる、おとす。

うつせる うつする。

うったくる 打ちなぐる。

うったつ 打ち立つ。着手する。抜立つ。「うちえ」うちたちて、

わざわざ何々する。

うっちえく 打ち捨ておく。置き去りにする。

うっちえーちえーけ おきざりにしておけ。

うっちやぶる うちやぶる。打ち割る。

うっちやめ うちあめ。風のために雨が家の中へ降りこむこと。

うっちやる 有りのままを申し立てること。又釣がはづれたり釣系

が切れたりなどして魚を釣りよこねること。

うつらはんしよう うつら半承。他の言うことを確と聞きとらぬ。

うつろう よく聞きとめること。理解できる。「たかよ」よく分

ったかよ。又見通しができる。

うづもうる うづまく。煙が盛んに出ること。

うてー うとい（疎）。敏くない。「うとか」うとい。

うとか うとい（疎）。知識が不充分なこと。

うとむ 多数の人の何彼といいののしること。

うとる 台風等の影響で山が霞むこと。

うぶ 嬰兒の頭蓋骨が固まらずに呼吸のたびに前頂の動くこと。「

がうつ」。ひよめき、又おとり。「きん」初産生衣。

うらかぜ 裏風。風の方向が変る前に現在の風向とは違った方から

吹いてくる風。例えば現在は南風であるが暫くすると西風に変る

場合また南風であるに係わらず西から吹いて来る風を裏風という。

うらぶ 指の根元の方が腫れる瘰疽。もとぶは指の先の方が腫れる

瘰疽。

うん さよう。はい。又うぬ（奴）。

え之部

え餌。「が流れた」鯉の餌となる「いわし」「さば」などの稚

魚が群をなして潮流に乗って浮遊しておること。「だち」浮遊

する餌の群。この場の餌は水平に泳がないで体を立てておる。

「えだち」の語の出た所謂である。この餌をとるには大きなたも

を魚群のまん中に垂直に突き差すのである。これを「餌をさす」

という。魚群の外側からたもて搦うたのでは餌はたもに入らない。

垂直に差せばたもいっばいに餌がはいるのである。又浮遊する餌

についておる鯉の群。この「えだち」に会えば満船する大漁をな

し一日に二回の出漁して大漁することがある。この二回三回の漁

獲を二番えと三番えとという。

えー あい（藍）。「やめ」藍染め。「がめ」藍瓶。

えー さよう。又よい、はい。又酔い。

えくれーばう 泥酔者。

えくろう 酔う。

えこう いこう（衣桁）。

えじき 好物。「しちよる」何物よりの好物にしておる。

えった えた。又癩病者。

えーとー やいと(爰)。

えなご 柄長ひしゃく。船のあかなどを汲むために特に柄を長くしたひしゃく。

えぼ ふだ(札)。荷札。

えれき 電気。

えんか えぐいこと。喉を刺激していらいらするようないき味がする。こと。「ーいも」食わずいも。

えんこ 糞。

お之部

おい おのれ(己)。自分。「ーどが」おれた^{ども}ちが。「ーとめー」

おれどもに、おれたちに。又おり(折)。

うん

うんが

わい

わーい

にし

わんが

おみ

おみども

おみたち

おいとき 折りとき。おりめ。

おいはしい 折り走り。斜めに風をうけて右へ左へ折り返し帆走すること。まぎり(間切)走ること。

おいめ 折目。おいとき。定められた行事。

おいもん 織り物。

おいる おりる。「船からー」。

おうくわん 往還。大通り。大きな道。

おうぢき いおつき(魚突)。やす(箸)。魚扱。

おえ はえ(生)。「ーもん」天然自然に生えたもの。「ーる」はえる。

おお はい(忘)。人のめす御いらえには男は「よ」と申し女は「お」と申すなりと物の本にある。をを。

おおいえ おもや(母屋)。本家の住家。

おおき 大禾。さとうきび(甘蔗)。

おおばーれー 大抜い。

おおばん 正月のかざり。新しい茅又は藁で作ったむしろを垂【¹⁶オ】れ椎の若枝の皮を去ったのを横たえこれに大根を二本一把にして二把を一掛けとし左右一対にし干魚一対串に差した餅一対(一串に三個の餅をさす)昆布一対などをしめ飾りと共に祝いたるもの。大判。

おおようぎ 大夜着。ひろそでの大形型なもの。

おかじょうき 陸蒸気。汽車。

おがわき おが(大鍋)別き。大鍋で木材を縦に挽き割ること。

おーき おき(煥)。薪の燃えて炭火になったもの。

おきどう 冲曾根。遠い所の曾根。

おきどこ ろべを差すためにしつらえた床。椀材を用いる。

おきなー のどちんこ。のどびこ。口腔の奥に垂下した軟口蓋の尖端即ち懸壺垂。

おきんこんぼー おきあがりこぼし(不倒翁)。

おきんとなか 沖のとなか。海のただなか。

おぎら じまん(蹟)。「ーをかくー」じまんをする。

おくい おくり。葬送。おくいを見るときは前天の小枝を髪に差す。邪気を祓うため友引の日には日中葬儀をしない。日が暮れてから行う。

17ウ

おこいさめ 熱祭したり冷えたり。悪寒。

おこしび 熾火。塵などを沢山に積み重ねて燃す火。

おこどい おこぎり。在家の者仏門に帰依する証として行う儀式。僧侶がかみやりをその人の頭に当てて剃るまねをすること。又死者に対してこの儀式を行う。(お髪剃)。

おこもち 粉餅。煎粉をこねて径三糎位の棒に作つて糸切りにし華儀には竹の串に差したものを斜違いに組み供える。この餅は当日中に皆食べて明【18オ】日に持ち越さない。会葬者や□門の人々に上げる。

おこれ おこり(瘡)。

おさ えら(鰓)。

おしかくる 櫓を押して船を相手の船に乗りかける。「おしかける」。

おしまき こもに畳ござを張りへりを附けた敷物(地敷)。

おしむぎ 押麦。ひらむぎ。

おしやぶい 身なりを飾ること。又その人(お洒落ぶり)。おしやぶい。「おしやぶる」。

おすけられる 押えつけられる。うなされる。夢に怪物などに押えられて息も止まる思いをする。

おせ おとな。

おせもん お誓文。大工が建築や造船が落成したときに祀る聖徳太子が【18ウ】作られたと伝えられる祭文。「ーはこ」おせもんを納めおく箱。統領を譲るときにはこのおせもんはこを引き継ぐものとしておる。

おせん お膳。ごはん。飯。

おせんこばーち 押餅の粉鉢。すりこばち(摺粉鉢)。

おちよぶし 大津江節。

おつけ おつゆ(汁)。

おっこい 思わぬ幸運が舞いこむこと。「ーした」。

おつとる 押しとる。盗む。

おつる おちる(落)。

おとぎばなし おとぎばなし(お伽噺)。

おとこ おつと(へ夫)。又情夫。

おとこずわい 男坐り。あぐら。

おとしくぎ 船材を固定するための頭部が丁字形になった釘。

おとしばなし おとぎばなし。

おとてー おととい。一昨日。

おどむ 眠っていたのが目がさめる。

おーなき 仰向くこと。おーなく。酒の異称。

おなーぎ うなぎ(鰻)。凡そ鰻には三種類ある。普通のを「まうなき」といい「まうなき」のうち頭部の細いものが良質で頭部の太いものを「がねくれー」(蟹喰)といって味が落ちる。竹の皮に似て斑点のあるものを「ごまおなーぎ」といい体長七十糎に及ぶ。又「ちんのおなーぎ」というものがある。体色灰色をなし黒点あるものもあり体長三米余に及び川の主とか池の主とかいわれるものである。「ごま」も「ちん」も肉厚く脂多くかば焼きにはならない(ごまの小さいのは蒲焼きすることもある)。みそ煎りにする。

おーなく 上を見ること。仰ぎ見ること。あおむく。

おなご 女子。情婦。

おなごたまし 十一月頃北の季節風が連日吹いて急に寒くなる。冬が来たことの警告である。女達は冬仕度に多忙を極める。衣裳や夜具やとてんでこ舞である。やっと準備が出来た頃には又暖かになる。天候のいたづらに騙されたのである。

おとぎばなし おとぎばなし(お伽噺)。

おとこ おつと(へ夫)。又情夫。

おとこずわい 男坐り。あぐら。

おとしくぎ 船材を固定するための頭部が丁字形になった釘。

おとしばなし おとぎばなし。

おとてー おととい。一昨日。

おどむ 眠っていたのが目がさめる。

おーなき 仰向くこと。おーなく。酒の異称。

おなーぎ うなぎ(鰻)。凡そ鰻には三種類ある。普通のを「まうなき」といい「まうなき」のうち頭部の細いものが良質で頭部の太いものを「がねくれー」(蟹喰)と

いって味が落ちる。竹の皮に似て斑点のあるものを「ごまおなーぎ」といい体長七十糎に及ぶ。又「ちんのおなーぎ」というものがある。体色灰色をなし黒点あるものもあり体長三米余に及び川の主とか池の主とかいわれるものである。「ごま」も「ちん」も肉厚く脂多くかば焼きにはならない(ごまの小さいのは蒲焼きすることもある)。みそ煎りにする。

おーなく 上を見ること。仰ぎ見ること。あおむく。

おなご 女子。情婦。

おなごたまし 十一月頃北の季節風が連日吹いて急に寒くなる。冬が来たことの警告である。女達は冬仕度に多忙を極める。衣裳や夜具やとてんでこ舞である。やっと準備が出来た頃には又暖かになる。天候のいたづらに騙されたのである。

おとぎばなし おとぎばなし(お伽噺)。

おにとい 鬼とり。子を取ろ子取る。

おねば やえば(八重歯)。

おのこもん 芋の小物。芋麻(お)て作ったひも(緒)(綱よりは小さいもの)。

おぼ おばいけ。鯨の身と尾との間の肉。

おはーる 昔おはるといふ愚女が居た。何をさせても満足にできない愚しき者という語。

おーび 帯。「ーとき」男児は五才九才女児は七才を迎える大晦【

20才】日の夜幼児期の附けひもの帯を解き普通の帯に代える儀式。幼児から少年少女になつた祝ひである。近親の家へ行き帯を代えて貰うのであるが今は正月七日に七つ祝として七五三の祝いとす

る。
おーぶく お仏供。仏前や墓前に供える飯。さば(散飯・生飯)。普通の供膳用の飯の上部のお初をとりに碗に盛つて供える。「おぶくわん」。

おぶくれる おぼれる。水に溺れる。

おぶし 背節。魚の背の身で製した節。

おぶつかん お仏碗。仏前墓前に供える飯。おーぶく。

おぼえしらーち 覚え知らずに。前後不覚に。

おぼけたす 空気にさらして熱気を出し去ること。おぼけ(火気)出す。

おみ お身。あなた。「ーたち」あなた方たち。

おめーむなか 思いもなか。思う心もない。にくたらしい。

おーもさんほ 思存分。

おもす むす(蒸)。

おゆる はえる。おえる。

おらぶ 呼ぶ。叫ぶ。

おろ 牧に放ちおいた馬を捕えるために馬を追い込む場所。昔時毎年牧を定めて馬を放ち農繁期や肥料の必要あるときに馬取りをし

た。この日青年達は「馬取いべんじょう」といって新しい半纏を着女子は「へくいべんじょう」といって新しい布を色々の模様次第はぎして作った半纏を着て牧の一方から追い立てて「おろ」に追い込みて捕える。或る時栗生の馬取りの折りに(西の牧で)馬争いが起きた。甲乙二人して一匹の馬を自分の馬だと主張して中づらない。村役人の知恵者が居て馬争【21才】いに裁決を与えた。ここは西の牧の「おろ」で「馬ごーめー」(馬込め)といふところである。役人は馬を村の方へ向けて鞭で尻を叩いた。馬は一目散に人家の方へ駆けよった。栗生川が干潮になつていたので馬渡しを水しぶき上げて行つた。□の争人は不平だらだらであつたが村役人の指しつて家へ帰りみると馬は自分の家の棚の下に佇んでいた。馬は一年放牧されていても自分の家はちやんと心得ておるのである。屋久島の家は殆んど全郡家の前庭に棚をかけていた。物干しに便利で正月には取りこぼち春になつて又建てるのである。家の縁から昇降するように取りはずし出来る板橋をかける。

おろす 「枝をー」枝を切り落す。「荷物をー」。

おわさ うわさ(噂)。

おわしる うわしる(上汁)。

おん おに(鬼)。又うに(海胆)。おんを採取し夏日腐らして乾いたものをはたき肥料とする。各種の要素を多量に含有し優良な

総合肥料となる。

おんがめ とうろう。かまきり。

おんき 温気。熱気。

おんじょう 嫗尉。本来は老人男女を指したものであるが専ら老男

子に用いる。「ーくさかーちぢくさい。

おんの子 鬼の子。鬼子。畸型児。齒の生えて産れたものも「おん

のこ」にされた。鬼子は殆んどが生存出来ないものであるがその

中には立派に生育すべき素質のものもままあったと思われるので

あるが鬼子は生れるとすぐに一定の場所で火葬されたものである。

おんばく おうばく。おうばこ。

おんぼう 媪母。老母。

か之部

かい かり(借)。「ーもん」かりもの。「ーぎ」かりぎ(借着)。

かーい かるい。かるう。せおい(背負)。又かゆ(粥)。又かり

(獵)。「ーどん」かりうど。

がい しゃかり(叱)。「ーつける」しゃかりのしる。「ーとばす」し

かりとばす。「ーたくる」しゃかりのしる。

ーがーい きょうさま、ごっこ。「はしいー」走りぐら。「とびー

しとびぐら。「といてー」とりぐら。

かーいちえ …やがって。「しー」しやがって。「いいー」いいや

がって。

かいのお かるう(背負)の緒(お)。葉又は蘭草などを組み又は

纏うてつくり「しゅうた」を背に当てて貰う。主として婦人が用

いた。

かーいのこ 大根を米の目に切り肉などと煮込みにした料理。

かか 母。

かかい かがり(掛)。「ーもの」掛り物。「ーご」掛り子。

かがい 細い緒(そ)又は藤蔓などで編んだ背負かご。又土などを

かつぎ運ぶもの。竹又は藁などでつくる。あじか(簀)。

かがい かがり。火を燃して明りを採るために用いる鉄製の網台。

漁火をたくにも用いられる。

ががいのこ 鋸の一種。木を挽き割るに用いる齒のあらい鋸。

かがみ かます(吹)。

かがる ふるる。いろいろ。もてあそぶ。「末子にー」末の子の扶養

を受ける。

かーき 柿。又垣。又牡蠣。

かーぎ 鈎。「ーちちよー」かぎ。

かくい 拡囲。坑などの広さ。

かくごう かけご(懸子)。

かくら 拡座。かくい。

かけぶね 掛け船。後から行って仲間入りすること。鯉を餌付けし

ているところへ後から行って仲間入りして釣る船。

かけんど 胴の間の次ぎの間に設けた櫓。

かぎきい 風切り屋根の両側にあつて風を防ぐ板。

かさごーき 蓋付きの木椀。

かざすべー 雨のしづくという降るとも知らぬ程の極小雨。

かさぜ 珊瑚礁。

かざばな 季節はづれに咲くあだばな(徒花)。

かざめ かざめ(蟪蛄)。

かしあわん それに堪えない。間に合わない。事の分量と釣り合わ

ない。

がしいら 弱者。

かしき 緑肥。又かしき(炊)。飯を炊くこと。又その人。「ーお

け」米とき桶。

がしやめ ものの役に立たない者。

かーす かす(糟)。又からす(鳥)。「ーぐい」からすむぎ又か

らす瓜。「ーのみづあぶい」鳥の水浴び。鳥が水浴びをすれば雨

になる又鳥が水あびするように早く入浴をすませること。

かすい かすり(飛白)。又かすり(掠)。「ーきづ」かすり傷。
かすぎ かすがい(謎)。

かせ 船を繋ぐ杭。もやいぐい、かし(戕削)。又坂道を登るに便
にするために用いる土留の木。又織物の原糸(袴)。

かーせー かせい(加勢)。仕事の手助け。
かぜぐるまぞう 風車草。沃針麦。幹は蔓性節毎に根を下す。海浜
に産す。葉は錐状鋭利。実は十五センチ位の長い芒を有するさま

大麦に似て円形に結実する。夏日熟すれば幹を離れ風に乗って芒
を足にして廻転するさま風 のようである。

かせんいきもせん 風の息もせぬ。そよとの風もないこと。
かた 肩。船の風上の方の側(がわ)。「ーをいれる」かたを強く
しめる。「ーんせん」かたの栓。又その栓を差す穴。

がた びた(潟)。海に近い土地。又海に近い空。
かたいつ ぼう 片一方。かたつら。

かたがたしい むざんなこと。むざたらしい。
かたぎん 肩衣。綿入りの袖なし。じんべ。

かたげーし 片岸。片方は高く片方は低いこと。
かたづめ 片詰め。一方から程よく詰め合わせ整理すること。

かたつら 片面。対になったものの片方。
かたなぐれ 片なだれ。片方から次ぎ次ぎに。

かたに 片荷。一方に片寄った積荷。
かたむる かつく。

かち かち(徒)。歩いて行く。陸路。
かーぢ かぢ(舵)。「ーとい」舵取り。よい方向へ取りなしてい

くこと。「といー」取りかぢ。左へ向ける場合。「おもー」おも
かぢ。右へ向ける場合。「よーっそーろー」よー候。よろしい。

真正面に向ける場合。又かぢ(鍛冶)。

かちえ かち。

かちえもん 糶物(かてもの)。飯の菜。
かーった おかしな。腑におちないこと。がてんのゆかないこと。

がつくい がっかり。落胆。
がっしい がしがししてあること。

がつつい 全くそのように。完全に。全部。
かってー かったい。癩病。又その病人。

かってしゅう 勝手宗。勝手なことをする人。
かってーしゅう 片方から次ぎ次ぎに。

かっぶい 完全にかぶさること。「ーかぶった」完全に覆った。又
かっぶり。「ーげた」かっぶり下駄。かっぶりかっぶりと言がす

る。少女又は芸妓などの履くもの。「こっぶりけた」。
がづま がづまる。がじゅまる。よく気根を出す熱帯樹。

かつれ 霞がかかり又薄雲が棚曳きもつれて何か不安の気配のする
山や空の様様。
かな 糸を一定量ずつ束ねたもの。

かなご 金いかり(碓)。
かなちえがら かなてこ。石エが槌子に使う。

かなちよか やかん。
かなつつ 金槌。

かなづつ かなつつ(金槌)。
かなとこぐも 金床壘。東方に現われる原子雲のような形の雲。こ

の雲が現われると大風になる。
かなようじょう かねがねの養生。平常からの養生。
かね 銅鉢。勤行の折りに打ち鳴らす鉢鐘。又突鐘・半鐘時鐘など。

又穀粉を沈澱させたときの上質の部分。又歯を染むる歯黒。「ー
をつける。

がね かに(蟹)。「ごま」やどかり。

かのしか しか(鹿)。

かのしし かのしか(鹿)。

がのみ (我飲)。強いて大酒を飲むこと。

かぶす 罪をかぶせる。又餌をまいて魚を集めること、かぶし。

かぶる こうもる(蒙)(冠)(被)。「水を―」。「帽子を―」。

「罪を―」。

27ウ

かぼね 氏・血統。

かまあし 鎌足。鎌のように曲った足。外方へ曲ったものを「そと

がま」内方へ曲ったものを「うちがま」という。

かまいい 釜煎り。焙炉の代りに平たい鍋で煎り茶を製造すること。

かまくさか 釜に飯などのこげ付いて臭いこと。焦げ臭いこと。

かまつつ 赤粘土。

かまぼう えら(鰓)。又あご(頭)。

かみない かみなり(雷)。

かむ たべる。歯を労することの多いものは「かむ」少ないものは

「くう」という。「さかなをかむ」「もちをかむ」「飯をくう」

「果子をくう」。大島では食うこと飲むことをすべて「かむ」と

いう。「飯をかむ」「茶をかむ」「汁をかむ」。

かめない かみない(雷)。「―ふくどう」雷がしきりに鳴ること。

かーもうじ かもじ。髪文字。髪の中に巻き込み髪形を整えるもの。

からてこ(棧子)。「―をいれんかよ」てこを使うようにせよ。

からいも 唐芋。といも・とんぼ。甘藷。さつまいもは元禄十一年

種子島栖林が琉球王から籬一箆を貰い受けこれを種子島に試作し

たのが日本へ伝来の溢儀だといわれておるが屋久島では余程早く

から所謂「やくしまいも」がある。この品種は琉球や台湾にない

品種で塊根は長手のもので肉質黄色で筋が多く軟かく収量が少く

保存力が弱い。恐らく遣唐使の船から伝来したものとされる。

粟生は天文時代までは芋生村といい今日でも諸が適しておるとい

われる。これが江戸時代前の屋久島の主食物であった。寛永(一

六二四)の初頭屋久島琉球間に交易船が往来するようになった。

屋久島の人達が琉球へ行って琉球諸のすぐれた品種を見且つ味

了驚歎したにちがいない。彼等は直接琉球諸を持ち帰って繁殖を

計ったことは疑いの余地がない。寛永十二年(一六三五)如竹が

琉球から帰るとき【27ウ】琉球諸を持って来なかつたのは屋久島

には既に琉球諸が植栽されていたことを物語るものであり屋久島

の琉球諸が種子島から伝来したものでないことは明である。屋久

島は諸の名称をすべて伝来の地名又は人名等を附けて呼んでおる。

琉球諸「じやくじん」大島から伝ったものを「おおしま」幸吉が

伝えたものを「こき」等である。若し琉球諸が種子島から伝った

のであるならば何かそれに因んだ名が出来ていなければならぬ

筈である。それが「じやくじん」の名で呼ばれていることは琉球

からの伝来を立証しておると思われる。琉球諸の伝来は屋久島に

おいては栖林公より十数年前のことであると推せられる。

からげ 束ねくくる。「―」荷物をくくる。荷造り。

からやう 苧麻を用いて作った太い網。からや(唐麻)(唐緒)。

からやうづな(唐麻網)。

がらっぱ かっぱ。「ごん」を見よ。

がる しかる。「がいたくる」しかりつける。

かるう 背買う。又蒸棺が発するとき死者の肉親のものか一人は前

へ向き一人は後へ向き白布(曳綱)を肩にして死者に出発を告げ

る儀式。

かーるう せおう。

かれこーす 枯れ越す。枯れ過ぎる。「かれこーした」。

27オ

がれいぶ えびづる。

かわうそ かわおそ(類)。

かわき 食いしんぼう。

かわせいら 川瀬カハセ。細長くごろごろした処を「せいら」(狭瀬)

という。川の縁のごろごろした細長い処。川原。

かわら 船の竜骨。まぎりかわら。

かんげいむなか 考えもなか。かんげむね。仰山。沢山。又慮外。

かんじや 閑舎。廁。便所。雪隠。閑所。まなか(閑中)後架はば

かり・手洗・ひどの等の名あり。

古神様が諸々の神々の役割をきめたときに最後に便所の神が未定

なことに気が附いた。仕方ないので一番えらい神様即ち諸役の割

当をした神様が便所の神を引き受けた。便所の神はこのように神

々の中でも最も優れた神様であるから【28ウ】便所へはいるとき

には先づオーに頭を低くしてお礼をせねばならない。そのために

便所の軒は高さ四尺と定めたものである。おじぎをしてから二番

目には「エヘン」と咳払いをする。無断で這入ると便所の神様が

おこることがある。

かんしゅう かさ。雁着。

かんづけ 寒漬。長大根を水洗いして塩を充分に揉みつけ樽に漬込

み重石をかけ一週間充分に汁上げしたものを取り出し水洗いせず

にそのまま吊して干したもの。乾燥したものを瓶に入れ蓋をよく

しておけば何年も保存ができる。薄く切り水に浸してもどしたべ

る。湯をかけると味がおちる。鯨節や黒のりなどをまぶせば【29

オ】更によい。

かんどう かんどう提灯。風雨を防ぐため外殻を附けたもの。金灯。

裸のものは「ことぼし」又「てしよく」という。

かんぶい 椽瓦のかわりに棟にかんぶりとかぶさるように製した大

きな棟瓦。

かんぶいとせん 少しのささなみもないこと。がりぶり(小さい

波のおるさま)ともしない。

かんまく 頑墓。頑丈すぎたさま。不体裁なもの。

き之部

き 氣。精氣。精液。

きい きり(義理)。「ーはい」きりと張り。又きり(限)。「ー

むなか」限りもない。

きいきいめー きりきりまい。

きいだめ 切り溜め。料理物飯などを入れておく箱。【29ウ】殆ん

ど入れ子に造られてある。

きいのお 切り緒。指し繩。捕縄。芋麻でつくる。

きいや 切り矢。やじり(鎌)。

きいやげ 切り上げ。成り上り。成功。

きおい きおうこと(競)。漁船が勇み立って唱える掛声又櫓拍子。

鯨の大漁のときには「はーらいよー、はーらいよー」中漁のとき

には「ヤーがよいや、ヤーがよいや」少漁のときには「ヤーすい

よい、ヤーすいよい」という。又原部落の人達は鰯魚を大漁した

ときには海上で部落へよく聞える一定の個所で「おー、おー」と

唱える。

きおう きおいをなすさま。

きおんぐち 祇園東風。(七月下旬)祇園祭りの頃に幾日も幾日も

吹き続く東風。

きかいはさみ ばりかん。明治初年にフランスから髪刈り機械を輸

入した。これを「バリカン」と呼んだ。「バリカン」は「バリ」

の製作会社の名であった。「バリカン」社製作という意味で「バ

リカン」と呼んだ。両手用片手用又電気ばりかんと種々ある。

きざれ 木切れ。木の切れはし。

きく きくわた(菊躰)。菊の花に似たのでいう。S字躰。

きくら きくらげ(木耳)。白木耳は不老不死の靈薬という。

きさく てきはきして打ち解けやすいこと。明朗なこと。

きさなか きたない。汚らわしい。

きさねー きさなか。

きしし 岸。又土手。

きしもと 岸元。いま吉元とするは誤りなり。栗生の民家所在の大

部分(二)は古昔内湾になっていた。それは古昔の木製碇(やまたろう

てあり葦の生え残った所であったから岸元或は葦元と呼んだので

ある。なお「やまたろう」を参照せよ。

きたおとし 北風。北又は北々東の風が山から吹きおろす旋じ風。30

きたきたぐち 北々東の風。丑の方から吹く風。

きたぐち 北東風。丑寅の風。

きちきち ぼうふら虫。又水すまし。

きうちよう 太とい網を綯うときに用いる回転取手。

きつい 困難なこと。「仕事が一」。又かたい(固)こと。「栓が

きつか きつい。

きつくい しゃくり。

きつくきつく 呼吸もたええにもがき苦しむさま。

きつくさつく きつくきつく。

きつた ごむ。「—まい」ごむまり。「—きんたい」ごむまり。31

きつちよう 義長、長さ十五センチ位の木を削り(の)形に作り頭部

を押えて後部の上ったところをこれも十五センチ位の長さの棒(

ぶち)で叩き遠くへ飛ばせる。それに「ぶち」を投げて當ればそ

の「ぶち」で発点までの距離をはかり距離の大なるを勝とする遊

技。元来は平安朝時代貴族の間に行われた「ぎつちよう」(義長

から変遷したもの。古昔朝廷貴族では今日の「ごるふ」に似た

遊びがあった。木製の球を「クラブ」に似た比すべき彩糸で飾つ

た木の槌で叩く遊技である。この槌が義長下世が下ると共に庶民

の間に「ぎつちよう」が発明されたのである。

きどい 気取り。

きのごき 木の椀。

きのーってー 先日。「—んはん」先晩。

きのーんばん 昨日のよべ。一昨日の夜。

きひざこ きひなご(鯉)。

きひちよう 急須。きひちよか。

きひちよか きひちよう。

きぶい きぶり(木根)。

きまーつ 木松。昔はあんどんだけでは暗いので夕食のときには家

の中でも松火(あかし)をたいた。盆や正月には折角煤払いをし

てきれいになつた家をくすべるのをきらい松の代わりに推又はま

てばしいなどを小さく割つて乾燥したのを燃いた。広葉樹の薪を

「まーぎ」真木という。真木の松(松火)との義下ある。

きん ころろぎ。

きむる 定める。決定する。又しかる。

きめる きむる。「きめつける」しかりつける。

きもん 着物。

きようま 京間。曲尺六尺の間を京間というが正しくは京間は六尺

三寸又は六尺五寸田舎間が五尺八寸間の間(あいのま)即ち京間

と田舎間との中間の間が六尺である。

きよがな 清鉦。仕上けに用いる鉦。

32

きろくたけはち 木六竹八。旧暦で木は六月竹は八月が伐採の好時

季だとの意味であるが屋久島のような多湿高温の所には通用しない。屋久島の木竹の伐採季は冬季で殊に竹は十二月から一月の間

伐採したものには虫がつかない。木も水下りして水上り前の十一月から翌年二月頃までが最好の伐採季である。

きわき 性急。きわきわしきさま。せつかち。
きん 拳丸。「一たま」拳丸。又陰囊。ふぐり。

きんさん 勤々正堅。
きんちやつきー きんちやく切り。すり。ちぼ。
きんぢよう 斤量。秤りの大きなもの。小さいものは「はっちきー」という。

く之部

くい くり(繰)。「一わたし」繰り渡し。又くり(剝)。「一ふね」剝舟。丸木舟。

くい くり(栗)。屋久島には自然生の栗の木は栗生の東北方の極く限ぎられた地域にあるだけである。栗生は天文の頃までは芋生村と呼ばれていたが屋久島で栗の木の自然生があるというので栗生村と改めたのである。

くう こん(紺)。「一がきたい」紺がよく染った。「一や」紺屋。染物屋。「一やどん」染物店。又その業をなす人。

くえ 平木。又桶樽等の側板。くれ(榎)。
くが 陸路。

くぎぬき パール。又パールの附いた紐。
くさ 一種の瘰癧病。拳丸が腫れて悪寒を發するもの拳丸炎又【³³オ】「ちらぐさ」乳腺が硬結し腫れて悪寒を來たすもの乳腺炎又

「くびぐさ」首に硬結を生じ腫れて悪寒を發するもの頸腺炎等種類あり。「一ぶーりー」くさ賣い。くさがおこつて發病して悪寒

を生じたこと。

くさーが くさび(楔)。又くさび(根魚)。
くさわーき くさわき(草鷓)。獸類の脇腹の肉。

ぐしと 思いきり突き刺す。思いきり押え付ける。
ぐだか 沖縄島の北部の回頭（この地方の）に「くだか」と呼ぶ（地名がある）。この地方の「くだか」は琉球人達が漁業などで昔から養育したもので琉球のことを「くだか」という。「一じん」琉球人。

くちえー くちあわせ(口合)。相談。談り合い。
くちぎ 口木。炭窯の点火用とする薪。

くちさつペー 口まかせにものいうこと。前後の思慮もなく物言うこと。

くちば 口つわ。響。
くちびらき 口開き。巫(みこ)が神託を告げること。又白状。

くちわら かますに物をいっぱい入れて口が合わぬとき藁を覆うて口取りをする。そのわら、物が「一ぱい」は入ったその上に更に物を

入れる意。食後すぐに更に食べることに食物。
くつがいか くすぐつたい。
くつぐる くすぐる。

くつさいもん 腐れ物。取るに足りぬ人。唾棄すべき者。
くつしやめ くさめ(嚏)。

くつじる 転々反側して苦しむさま。
ぐつすい ぐつすり。「一ねむった」。

くつめく 病のために苦しむさま。
くどーれ 老いこむ。ふけこむ。老いてみすほらしいさま。

くねーが 九年母。
ぐのみ うのみ。

くびぐさ 頸腺炎。頭に硬結を生じ悪寒を來すもの。ヒーラリアの

32

33

一種。

くーびよーなげた 首を投げた。悲観した。

くぶい くくし。結び。

くぶる くびる。結ぶ。又火に入れて焼く。「薪をー」。

くまえーび 隈えび。しま海老。隈海老は伊勢海老の稚魚が大好物

で伊勢えびの繁殖を妨げるから伊勢海老の増殖を訂るならば先づ

隈えびを退治せねばならない。

くも 一人で使える土袋。

くやめく くよくよすること。

くらぐら 暗々。たゞぐれ。

くらむ 逃げうせる。罵りていう語。「どーけーくろーだか」どこ

へ行きやがったか。

くらわす くらわす。打ちたたく。

ーぐれー …ぐらい。「こいー」これぐらい。「あいー」あれぐら

い。「こしこー」こんなにかしはかり。

くろげえ 黒南風。黒雲に覆われているけれども雨は降らない南西

の風。

くろばと 黒鳩。からすばと。

くろぶし くるぶし。

くわ くわ(鎌)。「ーがき」くわがき。鎌で耕すこと。鎌で整地

すること。「ーがきづくい」畦立てをせずに平作りすること。

くわんくわん 裸下駄。歩むとくわんくわんと音がするのでいう。

ぼっくい。

くわんじん 勳進。乞食。物乞。「ーぼー」物乞いして廻る人。

ぐわさーっと 大きく破れ又は開かれたさま。

ぐわち 小使。使丁。用務員。

ぐわっさい ぐわさーっと。

ぐわんちよう 元朝。元旦。元日の朝。

ぐん 才智。

けー かい(貝)。又法螺貝。又澱粉の黒味をおひた部分。「ーの

しる」澱粉のけーを田子にして汁に入れたもの。

けーあげんふた 蹴上げの蓋。いさげの上甲板から下の船室へ出入

りするところを「けーあげ」という。その「けーあげ」の所にか

ぶせるふた。

けおいぐき 貝折釘。板をはぎ合わせるに用いる釘。

けくされ くされ(膚)。「け」は強めていう語。

けーげー 糞が後退したこと。「ー」になった」。

けーしい 下鹽。ふんどし。こしまき、おむつなどを洗うたらい。

けしき どんぶり物。すすりぶた、すはま台などに檢の葉などの果

物を添えたもの。又雲のけわしき模様。又かどかどしい人の顔の

さま。荒々しい勢いが表面に現われたさま。

げしむねー 下可もない。下可だけの値打ちもない。他を侮ってい

う語。

けしら きせる(煙管)。

けーしられたこと 知られたこと。「ーをいうな」。けーは強める

語。

けつとー けつと。毛布。

けつらしか けつらかしい。

けな こげな。このような。

けーどーもん 外道者。

けーなぶる なぶる。けいべつする。「けー」は強めていう語。

けーのしる おたまじゃくし。

けぶたか けむたか。

げむなか げんもない。間(ま)がわるい。

げむねー 芸もない。取り柄もない。甲斐性なし。他をのしりていう語。

けーよせ【この項別紙後貼】 啓誓。旧曆二月の節太陽曆三月五日

頃。強風の吹く頃で船舶は注意を要する時季である。この大風で貝を吹き寄せるともいわれる。

けらすみ 消し炭。

けーる かえる。孵化する。「けーれた」孵化した。

げーる 改良され又は訓練されたものが退化してもとにかえること。

げんげんはな げんげ。れんげやう。

げんしょう おしろい。「ーばなし」おしろい花。

げんやう げやう(懸想)。ほれる。

げんとう えんぎ。「ーがわいか」。

げんどう 他部落の人を久しぶりに訪問すること。同一部落でも遠

く離れた者が久闊を舒するときにも用いる。普通の面会という意

味には用いない。又他行している人例えば湯治場などへ行つてい

る人を訪問又は慰問すること。

けんなわ 測量用の間敷を計る曳き縄。

けんのたけー 見が高い。見識ばる。「けんのたつか」。

げんべー ばくち。「ーをはる」。明治初年までは正月の三日間は

正月遊びとして公然と「げんべー」が許されていた。座につかず

に立ったままでかけるのを立ち張いといった。

けんれい 県令。県知事。明治十九年の改正で県令が県知事となつ

たがやはり県知事のことを県令と旧式に呼んでいた。

こ之部

こあたい 小当い。少しのことで腹立てること。

こいたんご 肥たんご、こえたご。

こいだし 腰押し。腰さしの煙草入れ。

こいと ごつかりと。

こいとうしむねー いとしくもない。かあいげもない。

こいな このような。

こいほんなこと こんなにたくさん。

ごいもんぶろ 五衛門風呂。

こうい 行李。つづら。又竹などで編み楕円形にした飯入れ。「め

しー」。

こうかつもん 硬骨者。強情者。我を張ることの強い者。他の言に

耳をかきぬ人のこと。「狡猾者」ではない。嘗つて大阪市で巡査

試験を受けた者【38オ】の身許調査があつた。当時の果生世【話人

が果生の方言で「こうかつもん」「おうどもん」と誤つた。駐

在巡査は「性横暴にして狡猾なり」と報告した。のてその青年は

不採用となつた。その調査が濡れたので青年は終生の恨みとした

という事実がある。言葉の大切なことが痛感される。

こうくろしい 豪くろしい。かどかどしいさま。

こうげー こうがい(弁)。

こうじ こうや(楮)。

こうどき 香食。粉食。麦を炒り粉にしたもの。はったい粉。

こうせき 行跡。行儀。「ーじん」行跡人。整理整頓のよく行き届

き清潔好きな人。

こうはん 後半。はんば。

こうべー こうはい(句配)。

こうぼし こうぶし。番附子は莎草(はますげ)の葉名。

こうもいたつか こんもりと高い。

こうらしか 業らしか。かあいやうに。

こうらしなげー 業らしげに。かあいやうに。

こがやき 卵を天火で焼いたもの。卵をよくといて或は豆腐を和したりして白砂糖を加え塩少量。これを天火で焼く。黒砂糖はだめ。こがれる 気をもむ。焦心。

こきいも 七福藷。アメリカともいう。アメリカ系の藷。大正十年(一九二一)羽生幸吉神戸の酒会社の養幼機船に機関長として乗務中船長の上野徳松とその出身地岡山県備中国小飛鳥(しょうびとう)に休暇で遊びに行った折リ徳松が母から藷一畝を食用として貰った。その中から譲り受けて二十個を乗生へ郵送した。まことに味のよい藷なので種立てをしたが忽ち全島に普及した。幸吉の名を取って「こきいも」といい食用藷【39オ】の王座を占めておる。

こくす 粉屑。こなごなになったもの。

こげくさか こげくさい。

こげな このような。

こげん こげな。

こころ(こ)し(し)ーにらんは 志は蕚の葉。まごころ(誠心)があらは蕚の葉のような粗末なものでも志は通るものである。

こさんだけ ござんちく(鼓山竹)。

こじい こ(言)じり(尻)。言葉じり。「ーをとる」言葉尻をとらえる。

こしきもん 他をののしりていう語。音地悪者。

こじくんな こじけるな。

こじけ 寒い外気に身をさらすこと。「こじくんなよー」こじけてはいけない。

こしこぐれー こんなに少しばかり。これしこぐらい。

こしごし ぎきぎき。力を入れて物をすること。

ごしと ぶっやりと。

ごすきー 粉すくい。さじ。

ごせど 戸瀬戸。建物と建物との間又は建物と石垣などとの間の狭い通り。桁行の方だけに用い奥行の方に対しては言わない。又小瀬戸。瀬と瀬の間のせまい水路。

ごせん 膳。ごはん(飯)。

ごそくい 小すくい(糊)。素人がする間に合わせの小修繕。こそくる。

こたげー 砂糖になる前の糖汁。

こたれ 木垂れ。果実が着き過ぎて枝がたわわになること。

こちかせ 東風。

こーちこち しいやう。

こちんかせ 東風。

こつか 堅々しいさま。しなやかでないさま。

こつきこつき 引きしまって肥えたさま。

こくこつく 水などを勢よく飲むこと。

こっしなっし ぎきぎき。強く物をすること。

こっさい ござり。

こっとい 完全に、密着する。「ー行かんか」。「ー戸をたてんか」。すきまなく。

ごつとごつと ごとつとごつと、よく詰め合わせる事。又よろ

よろ「ーいかれんかよ」よろよろ急がずに行きなさい。

こつむ 木積む。一箇所に集めて積み重ねること。

ごーてー 五体。「ーがかなわん」。「ーはわ」五体と手足。ことほし かんてら。がんどうの裸になったもの。又豆らんぶ。小

燈し。

こーねーがーき 木練柿。甘柿。

こば 耕場。山島。「やまー」山地を開いた島。

こーぶ くも(蜘蛛)。「ぜんー」女郎くも。「やっちえー」ハチこぶ。大くも。「ーんやねこくものい。」

こぶい こぶり(小降)。又粉ぶる。米を臼ではたいて粉になすこと。こぶる。

こぶき こびき(木挽)。
こぶる 米を臼ではたいて粉にすること。

こへーだ 五平太すなわち石炭。
こぼーしゃ とりあげはば。産婆。助産婦。

こまーい 鳥居型の材を船の艫に立ててあり倒した帆柱を支えおくもの。その艫木に回転し帆柱を取り扱うための便としたもの。

こーか こか。産。
こみうち 産はたき。

こーもく ちりあくた。「ーせーもく」種々雑多の塵埃。
こもる 参籠。宮ごもりする。又春秋の彼岸会中に死者の命日がい

ること。
こよい こより(紙継)。

こよき 小さきよき(小斧)。
ころい 転ぶ意。重量物を運ぶとき丸太を敷きその上を歩いてまろば

せる丸太。ころはし。
ころいと 結局。ついに。とうとう。

ころつと 稍々大きいこと。又ころりと。
ころばかす ころばす。

ころひき ひきがえる(墓)。
ころびまーる 転び廻る。のたうちまわる。

ころふくりん ころふくれん(オランダ語)。西洋の毛織物。
こわい こわり(千瀬)。

こわめ 剛か。かたい(堅)。

こわる 瀬が干ること。
ごん かっぱが秋の彼岸に山へ登って「ごん」となる。「ごん」が春の

彼岸に水へさがって「かっぱ」となる。ごんはよく山の木を倒す音を

させる。山師の墨差を盗む。気味よいつきは「ほいほい」というて

通る。猿に似て猿よりも掛々小さい。これを見聞したという者は沢山

ある。又ごんた(権太)ごんすけ(権助)。他を侮りいう語。少し足

りないという意。
ごんね ごんね 尻を左右に振り立てるさま。くねくね。

ごんねん ごんねん ごんねん
ごんぶ ごんぶ ごんぶり ごんぶり 漂うさま。

ごんぼ ごんぼ うごめくさま。又まごまご。

—— 鹿角島大学教養部助教授 ——